宗學試案の中から

武田海正

一、佛の實在性

「宗學ではこれさへわかれば、あとは自然にわかるといふ樣な宗學の根本問題から解決して頂きたいと思ひます」

「宗學の中で最も根本的な重要問題といへば先づ久遠本佛です。佛には本佛、迹佛、分身佛などの佛がありますが、この中で眞實在の佛として自他共に信仰してゐるのは本佛だけで、本佛に對すれば迹佛や十方の分身の佛は体に對する影のやうな佛です。本佛といふ天の一月が十方佛土の萬水に影を浮べてゐるのが十方分身の佛です。この場合注意しなければならないのは、本佛は尊貴無上であるが、迹佛はそんなに尊くないのであらうと考へられ易い事である。一月萬水の譬は譬諭一分であつて本佛迹佛の尊否までを決定するものではない。本佛は迹佛をまつて初めて實現可能な佛である處からみれば、迹佛は本佛に功德を施してゐるともみられない事はない。電波があつてもラジオセツトがなければ、美音をきく事ができない樣に迹佛がなければ本佛は生きた人間を救濟する事はできないのである。そこで本佛の尊いのは迹佛と現れるからであり、迹佛が尊いのは本佛の顯現態だからであると知らねばならない。だから尊いといふ意味では本佛も迹佛も同一であつて、何等差別はないのです」

「それではその本佛も迹佛も何れも實在の佛ですか」

「私は壽量品の佛を久遠の實在佛として信じてゐます。そしてその分身の佛は本佛の天の一月が萬水へ浮べた影であると思つてゐます。だから諸佛は實在してゐるといはなくともよい。しかし世間には諸佛も實在してゐると思つてゐる人もある。もし十方分身の佛を皆實在の佛だと考へれば、本佛も諸佛も皆常住佛といふ事になる。常住佛なら顯現佛といふ事はできない。顯現佛とは出るべき時には現れ、去るべき時には去る佛である。如來であると同時に如去でなければならない。

この如來、如去の迹佛こそ本當に我らの規範となる理想佛なのです。迹佛や分身の佛は理想の佛であるとすれば我らはその佛を手本とし模範としてその通り實行しなければならないのであります。爾前迹門の釋尊も、彌陀も藥師も皆我らの理想佛だと思へば宇宙を呑吐する樣な雄大な心になるでせう。迹佛を理想佛とすれば我ら自ら釋迦となり、藥師となり、彌陀となつて理想の淨土を建設しなければならない。淨土や眞宗の樣に徒らに影の佛を西方に立てゝ伏し拜むだけでは、右や左のお檀那樣どうぞお惠み下さい連中とかわらない。本當に眞劍に彌陀を信ずるなら自ら彌陀になり切つて現世この土に淨土を建設すべきだ。

元來自分とは本佛自身から分れて來たものだから自分といふのである。だから本佛の心を心として本佛の事行を實行しなければならないのはあたりまへです。本佛は無量身に身を示現して心口意三輪の妙化を施して久遠の昔から今尙働き給ふてゐらるゝ。

本佛を私共の眞實体とし、その顯現の分身の佛を理想佛とすれば自分は或る時には農夫となつて草を取り、或る時は先生となつて教育し、或る時は生徒となつて教訓され、或る時は父となつて子を愛し、或る時は夫となつて妻を愛し、或る時は子となつて親に孝し、或る時は妻となつて夫を扶け、或る時は兄姉となつて弟妹を惠み、或る時は弟妹

となつて兄姉を敬ひ、或る時は軍人となつて國家につくし、或る時は政治家となつて國を治め、或る時は村民となつて村長に順ふといふ樣に、其の時と場合によつて自由自在に身をその方へ向けて働いてゆかねばならない。

妙音の三十四身、觀音の三十三身、本佛の六或示現等は何れもかうして活社會に對處してゆく方法を敎へたものであります」

二、死後靈魂の存在

「人間が死ぬとどうなるのだらう。我々の個人々々の魂がそのまゝ殘つてゐるのだらうか」

「殘つてゐると思ふね」

「永遠に變らない靈魂があるのですか」

「永遠に變らない靈魂はない」

「さうすると靈魂は消えてなくなつてしまうのですか」

「いや永遠に變らない靈魂がないといふ事は絶對不變のかたまりの樣な一種の靈魂はないといふのです。永遠に變らない靈魂があるといふ說を佛敎では常見といつて、これをまちがつた考の第一に數へてゐる。それから死ぬと肉体も心も消えてなくなつてしまうといふ考を斷見といつて破つてゐます」

「さうすると人間が死ねば有るのでもないし、無いでもないといふ樣なぼんやりしたもんで我々にはわからないのでせうか」

「いやわからないのではない。はつきりわかつてゐるのですよ。たゞそれをはつきり說いてくれる人がないのでせう。

靈魂といふと普通火の玉みたいにふら〳〵したものがふらついてゐる樣に思つてゐますね。本當の靈魂は決して火の玉ではないのですよ。火の玉の樣に物質的に考へるから永遠に變らないと思つたり、消えてなくなると思つたりするのです。靈魂といふと靈魂といふことばそのものにすでに物質的靈魂を想起させる樣な氣分があるから、これを心といつておきませう。人間が死んでも心は殘つてゐるか、どうかといふ風に考へるとわかり易いのです。私は心は殘つてゐると思つてゐます。殘つてゐるけれども一定不變ではない。心は永遠に存在してゐる。けれども變らないで存在してゐるのではない。變化し變化し時々刻々に變化しながら續いてゆく。つまり變化流動しながら永遠につゞいてゐるのであります。心が變化してゐるといふのは心の外に何ものかあつて心を變化させるのではなくて心自身が自ら變化する本能力を持つてゐてその爲に變化してゆくのです。

心自身の無限創造力によつて變化してゐるのですね。無限創造といふといかにも進化してゐる、限りなく進歩してゐる樣に思はれ易いがそれはいけない。進歩進化ばかりでなくしてその裏面には退歩退化も行はれるのであるからこれを變化といふたのであります。電燈が進歩すればランプが退歩する樣にすべて進歩と退歩とは同時に行はれてゐます。人間卵の分裂の時も四個のうち一個だけ進化完成して外の三個は退化して完成卵の中へ攝取されてしまうから人間が一人前の人間として世の中に生れてくる樣に、進退は同一時處に行はれるといふ事はあらゆるものすべてを貫く眞理なのです」

「心は無限に變化するといふところからみると靈魂が變化して火の玉になり得る時もあると想像できますね」

「さう、無限創造だから心自身が火の玉の樣なものになる希望があれば火の玉になれない事はないであらう」

「心は心自身の思ふ通り何にでもなれるのですか」

「さうです、本心にさめた心は何時何處へいかなるものへも轉生できます。覺めた心は彼自身欲する通り、希望する通り何にでもなれるのです。天國へ生れたいと思へば天國へゆける。極樂へゆきたいと思へば極樂へもゆける、地獄行を希望すれば地獄へもゆけます。もう覺つた心のゆくゑは自由自在ですね。但し覺つた心ですよ。迷つてゐる心はその反對です」

「それは面白い。心とはそんなにも自由なものですか。それだのに此の世の中ではどうも不自由で困りますね。金が欲しいと思つても金がまうからない。死にたくないと思つていつか死なねばならぬ。生きてゐるうちはこんなに不自由な心がなぜ死んでからはそんなに自由自在になるのでせう」

「そんな事はない。生前死後のちがひによつて、心の自由創造力がにぶるといふ事はない。如來の秘密の神通の力は生死をのりこえて實現する。本覺の心は生きてゐるうちも自由であり、死んでからも自由であります。決してそこに差別はない。生前に不自由、不滿の多いのはそれだけその人は迷つてゐるのであり、それだけ覺りに遠いともいへるのです。しかし不自由不滿がきわまつて覺りを求める心が芽ばえるのですから不幸必ずしも悲しむべきものではない。貧しきものは幸なり。富めるものゝ天國に入るは馬が針のみぞを通るよりも六つかしいといふ事もある。

また病氣は善知識なりといつて、病氣したおかげで信仰に入る人もある」

三、心と肉体

「しかし心は自由の天地をかけめぐりたく思へども、不自由の肉体がこれをじやまして思ふ存分發展する事はできないのではないですか」

「それを婆羅門思想ですよ。釋尊はさういふ肉体が心を束縛するといふ様な悪思想を二千五百年前に破つてゐます」

「この肉体も如來秘密の神通の力で動くのですか」

「さうだ。肉体だつて如來の覺りからみれば自由自在に改造できるのです。遠く例を引くまでもない。近く君の本覺心が君の身体をそんなに育てゝそんなに健全な体格にしてゐるのですよ。人間だつて最初はたつた一個の卵細胞ですそれが受精作用によつて分裂を初める。分裂し分裂して最後に立派な人間となるのであるが、その分裂は何んの力によつて行はれるかといふと科學者もそれは自然だと答へるより外にないであらう。法華經からみればそれは如來の神通の力で分裂するのである。その如來といふのは己心の本佛であるから本覺心といつてもよい。その覺りの心の支配力の下に分裂現象が統一的に行はれるのである。もしさうでないならば人間の身体は無限にのびて、奈良の大佛みたいな人間ができあがるであらう。それとも腦髓になる細胞も内臓になる細胞も手足になる細胞も皆同一形態になるならばそれこそ人間として役たゝぬ怪物ができ上るであらう。

それが事實そんな事はない。初め同一卵細胞であつたものが種々に分化して完全な人間になるのであるから、誰よりも賢明なる己心の本佛が働いてゐてすべてを見通し、全細胞を支配してゐるのであるといはなければなりません。だから肉体も長い間には己心の本佛のさしづに從つて修正される可能性があるのです。現に或る職業に轉業して三年たてばその顏にあらわれるといふではありませんか。たゞ死後は迅速に變化するが生前は徐々に變化するといふちがひはあるやうです。此の原理を應用すれば美人になるのには化粧よりも正しい信仰を持つ事が肝要であるといふ事になります」

「では死んでから天國とか地獄極樂とかは本當にあるのですか」

「本當にあるよ、地獄極樂は本當にあるのだけれども、それは心の自由創造力によつてつくられたものであつて誰もつくらない天然自然の地獄極樂などはないのです。迷つた心は地獄をつくり、覺りの心は極樂をつくる。自業自得とよく世間でいひますが人間萬事自業自得ですね。生前も死後も自業自得です。法華經の法師品の思想からみれば自分で希望して貧乏な家に生れ、或は富豪の家に生れ、或は邪見の家に生れ、其の他あらゆる人間に生れてきたのです。だから運がよい運が悪いといふ事はできない。清淨な業報をすてゝわざと法華弘通の爲に人間に生れかわつて來たのです。運命の神などはどこにもゐない。普通あの人は金が儲かつて運がよい。あの人は出世して運がよいと羨やむけれどもそれはよくない。それはその人が運命の神に支配されて出世したのではない。自性心の推進力によつてさういふ境遇を建設して行つた結果さうなつたのである。現世ばかりではない。過去世からのその人の努力がさうさせたのである。この世の中には現世の努力や實力だけでは解決つかない問題が多い。例へば金滿家に生れるとか健康体に生れつくとか、天才に生れるとか美人に生れるとかは今世の努力によつて決定されたのではない。

前世からの自己の本心の意欲によつてほゞ定められてゐたのです。だから佛敎では過去の因を知らんと欲すれば現世の果をみよ。未來の果を知らんと欲すれば現世の因をみよといふのです。

しかしかう云へばすべてが定まつてゐるのだから努力は無用だと思ひ勝ちであります。どうも人間の考といふものは時計の振子の樣に極端から極端へ走るくせがある。さういふ極端な思想は事實の認識をあやまらせるおとしあなであるから最も注意を要する」

「それでは一切萬事前世の定め事だからあきらめろといふのですか」

「日本のあきらめよといふ事を支那の沒法子式(メンファーズ)に考へてはならない。日本語のあきらめとは佛敎の諦めからきたこと

ばであつて元意は妙法を諦め明らかにするといふのです。眞實相を明らかに了解するといふのであるから、やむを得ないとか、もうだめだとかいふ思想とは全々反對の立場に立つものです。諦めるといふ事は、現在の果報をみれば自分は過去世にいかなる本願を立てゝこの人間の世に生れて來たかを深く洞察する事であり、現在の因行がはたして曠世の大理想たる佛土建設の礎石になつてゐるかどうかを反省する事をいふのです。あきらめる事によつてへこたれてはならない。あきらめて奮起しなければならない。奮起して努力精進した結果或は現世でも安樂に生活できる果報者になれるであらうし、未來はいふまでもなくよき果報にめぐまれるのです。此世で色心二法に佛心の題目を實行するならば現世安穩にして、未來には天國も極樂も靈山淨土も席を淨めて待てゐるのです」

四、地獄極樂はどこにあるか

「地獄極樂があるとすればそれはどこにあるのですか」

「あるといへばすぐさういふ風にすべて物質的に考へるのは現代人のくせですね。天國は天上にあつて地獄は地下にある樣に思へるが、實は天國も地獄も平地上にあるのです。もし上と下に分れてゐて住所が別々なら、天國に生れた人は天國の有難味がわからず、地獄に生れた人は地獄の苦しみがわからない。天國からよくみえる所に地獄があれば本當に天國の樂しみがわかり、地獄からみえる所に極樂があれば本當に地獄の苦しみがわかるのです。もし地獄極樂が別々の世界にあつて絕對に一方から一方がみえぬ所にあれば、それでは地獄でも極樂でもなくなるのである。なぜ。さうすれば地獄に住む人は地獄を日常茶飯事と思つて居れば別に苦しいと思はなくなるであらう。極樂にすむ人もこれが普通となればもう歡樂にあきてしまつて、樂しみを樂と思はず反つてそれを苦しいとさへ思ふ樣になるであらう。

それでは地獄極樂の價値はないのです。地獄はあくまでも苦しく極樂はあくまでも樂しくなければ眞實地獄だの極樂だのといふ事はできない。そこへゆくとこの娑婆世界はうまくできてゐますね。地獄も極樂も皆眼前に展開されてゐるのですからね。」

「眼前に展開されてゐるつてどこにあるのですか。刑務所が地獄で寺が極樂ですか」

「いやさう簡單にかたづけば問題はないがね。全く以つて不可思議微妙ですよ」

「さう獨りで悦に入つたんではさつぱりこちらにわからんではありませんか」

「えゝとその極樂といふ所はどんな所だと思ひます」

「山野には寶の草木が繁り池には金銀の蓮華がさき亂れ、慈愛にみちたみ佛樣がましまして、そこに生れた人は心の欲するまゝに自由自在に衣食住が享有できる所と思ひます」

「そんなよい處がこの娑婆世界の中にあると思ひますか」

「さあ、どうだかね」

「そこだ、佛眼を開いて佛土を照せだ。凡眼はくぢりぬいて大地にたゝきつけ佛眼をはめてみよ。そこには今までみえなかつた寂光淨土がみえる」

「何んだか神がゝりがもの言つてゐる樣で、はつきりわかりませんね」

「わからん。わからんのは君の心に迷ひの雲がかゝつてゐるからだ。その迷雲をとつてみよ。確かにみえる」

「ます〳〵わからんね」

「わからん。君は佛樣とはどんな方だと思ふね」

「死んだ人が佛様……」

「そんな答では宗教の幼稚園へ行き給へ」

「さう〳〵佛様とはお釋迦様の様な人だつたね」

「えらい。そのお釋迦様は人間だらう。人間が佛の法をとき、佛の行を行はれたから佛といふのです。佛とは覺りといふ意味であるが、その覺りの心を實社會へ實現した人を佛と申し上げるのです。その佛のまします土地を淨土といふのですから、釋尊の居られた處は何處でも皆佛土であり、淨土であり極樂です。」

「そんな極樂よりもつとよい極樂はないのですか」

「もつとよい極樂つて君は西方極樂だけを極樂と云つてもらへたかつたのだらう。あの指方立相の極樂は本佛釋尊の住む此土の靈山淨土の影ですよ。影だからいらないものといふのではない。影があくまで美しくあくまで莊嚴であるといふ事はその本体が美麗莊嚴だといふ事をあらわすものとして尊重しなければならないけれども、影だけみてよろこんでゐるのは映畫フアンみたいなものだ。佛の眼からみれば自然の山川草木も皆金にみえる。衣食住の何ものにも執着しないから心の欲するまゝに自由自在な生活を樂しむ事ができる。欲情に支配されてあくせくしない。欲情一切を適度に制御し支配してゆくところに佛行がある。だから佛とは最も人間らしい人間であつて、人間として行ふべき一切の行を正しく行つてあやまりがない最も人情こまやかであつて而も人情におぼれぬ智慧のある人の事でありますそういふ人の住む處はどこでも淨土です」

「死んでからも本當に地獄極樂があるのですか」

「まだあんな事をいつてゐるよ。生きてゐるうちにあるものは死んでからもある。本覺心の自由創造たる神力は久遠

の昔から未來永劫にわたつて續いてゆくのですからね。死ぬと消えてなくなる樣な事は理論としても立たないし、事實そんな事はない以上、死ねば地獄か極樂へ生れる事は定まつてゐます。しかしたとひ現世の因行が地獄行キップでも臨終に正念に住するか、遺族の供養によつては極樂へ生れかわる事もできます。また地獄におちてから家族が廻向供養すればその功德によつて、今まで地獄であつた場所がそのまゝ極樂へ早がはりするね。さやうに心は生きてゐるうちも死んでからでも存在してゐるが常に變化過程の上にあるのであつて、動かないものではない。だから死は決して無くなるのではなく、生の一過程にすぎないのです。この生よりあの生へうつる境目が死なのです。

人間界から地獄界へゆく時には人間界では死んで地獄界へ生れるのであるし、地獄界から天國極樂へ移轉する時は地獄で死んで極樂淨土へ生れるのです。だから死ねば現在より面白くない所へゆくとは限らない。と同時に死ねば現在よりよい所へゆくとも定まつてゐない。死んでも生きてゐた時と同じ境遇におかれる人もあり、不幸になる人もあり、幸福になる人もある。また人間へ生れてくる人もあり、地獄へゆく人もあり、天國や淨土へゆく人もある。

五、宇宙の大靈はあるか

「さうすると吾等は各自別々の處へ行つてしまうのですね。宇宙には全智全能の絶對神といふ樣な大靈であつて、死ねばそこへ一如融合するといふ話をきいた事がありますが、それはどうなるのでせう。本當にさうなるのでせうか」

「死後は宇宙の大靈に融合するとすれば善人も惡人も地獄も淨土も大靈の一にぬりつぶされてしまつて、個人の差別はなくなりますね。宇宙を創造しあやつゝてゐる獨一神を認めて、生前も死後もその神と合体するといふならば世にこれ程邪見なる迷信はない事になる。

こんな迷信を信じて安心したつもりでゐても、別に社會の安寧秩序を亂さぬ限り我國では信教の自由を許されてゐる。しかし少くとも宗教を信じ、正しい信仰に住して、いかなる學説にも動かされぬ金剛信に住したいならばそんな迷信はやめた方がよい。もし世界の背後に絶對獨一の神があつてこの世界をあやつゝてゐるのなら、その神こそ神ではなくて惡魔の名に價する惡魔であらう。なぜなら。その神は吾等人間を作りわざ〳〵苦界へ投入し、その苦しむのをみて獨りほくそ笑んでゐる。人間が四苦八苦七轉八倒してゐる姿をみて、まるで、芝居でもみてゐる樣に獨り惡魔の笑ひを續けてゐるのなら本物の惡魔ではないか。さうして人間が死ねばその惡魔に合体してしまうのならば此世でいかに善因をつみ、善行を重ねてもその賞は得られず、いかに惡事を働いてもその刑罰はなくして一魔神の体内へ融合してしまうのでは倫理道德を破壞する邪教ではないか。いくら巧妙な理窟をこねても善惡正邪の差別ある因行を毎日つみ重ねてゐる人が、死と同時に同一物に合体するのだといふ事は邪見であり、邪教であり魔教である以外何ものでもあり得ない。人間萬事絶對神のしわざなら、いくら惡事を働いてもそれはその人の罪ではなく、皆その神の責任であるといふ事になる。人間はたゞからくり人形にすぎぬから人間には何をしても少しの責任もない事になる。こんな信教を社會に弘めるならば社會はたちまち暗黑化するであらう。そんな社會秩序を紊亂し國家を亡ぼす樣な邪教は斷乎これを取締る必要がある」

六、神佛の救ひは可能か

「さうなると神佛の救濟といふのは嘘なんですか」

「いや神佛の救ひは嘘ではない。神佛は自己の体内へ迷へる人間を合一させて救うのではない。神佛の救ひといふ

のはむしろ人間の方で覺れる神佛の分心を頂き受けて自己の心を淨化する事によつて行はれるのです。例へば卵が受精するのには精虫が卵へ入らねばならない樣に、その人を救ふのにはその人の心の中へ覺りの心が突入しなければならないのです。久遠の昔から未來永劫にわたつて自己創造を續けるのには、その心の營養分として無量の聖賢の優秀なる心素を吸收しなければならない。神佛の救濟もそれと同樣の道を通るのです。釋尊の心は法華經にとかれてゐる。その法華經をよんだ人は釋尊の覺りの心を自己の心の養分として吸收し、自己本心の生育完成への素材とする。その甚だしく强烈に行はれた場合は心機一轉し大悟徹底するのであります。日蓮聖人の生涯を拜察すると、いつも日蓮が頭には大覺世尊かわらせ給へりといふ感激にもえてゐられた。この精神的な營養分は攝取すれば一方がへるといふ事はないのです。それは一本のローソクが他のローソクへ火をうつしたから初のローソクの火が暗くなつたといふ事はない樣なもので、一本から二本、二本から百本千本と多くつけばつく程世の中が明るくなるだけです」

七、唱題讀經の功德

「讀經唱題によつて死後の人間の靈魂はどんな御利益を得るのですか」

「それは生きてゐる人間が讀經唱題によつて自己の心を長養すると同じ御利益が得られる。しかし生前ならば自心を佛へ轉化させる爲に自己自らの力で讀經唱題ができるが死後になると自己自らはできない。他人の力をかりて經典にとかれてゐる有難い佛の心をきゝ唱題の聲をきいて、わづかに自心を長養するより外に方法がなくなる。しかし親族遺族が熱心に唱題供養下さればどんな邪見な死靈でも得道します。できる事なら生前に佛心を信解してゐた方がよい。生前に佛心を敎へておいた方がよい。但し生前は自分でも讀經唱題できるかわりに一度信解しても時々迷心にとらわ

れて忘れる事がある。死後の靈魂は一度信解すれば絶對に忘れない。しかし生前は讀經と說敎をきけば一度できゝわけるが、死靈は仲々邪見の度が强いからうけつけない。死靈は一度信解すれば永久に忘れぬかわり入信する時が困難なのです。だから邪見な死靈程、力强く熱心に御經をよみ唱題してあげぬと浮ばれぬ。そこでお經をよむのは佛の覺りの心を自他二心の營養の爲によむのであるから、力强くよくかみしめ、その意味をよく味つてよまねばならぬ。意味もわからず丸のみしたのではその味ひも、有難味もわからずにしまうであらう。けれども佛の心をといたお經、佛の心をあらわした題目をあげてゐるといふ信念はあるのだから、それだけでも自心と死靈は救はれたのです。意味がよくわかつてよむのにこした事はない。伊東町の柿沼先生が檀家へお經にゆくと、そこの婆さんは「先生のお經は本當に有難い」といつた。なぜ有難いかときいたら「先生はよくお經の意味を知つてゐられてよんでくれるから有難い」と云つたといひます。それが本當です。だからお經は眞讀より訓讀の方が御利益をよけい頂けるわけです。またお經のみならずお經を解釋したもの、佛の心を說明した御遺文をよんでもお經と同じ御利益が得られます。更にお經の心、佛の心をよく信解した人の話し、說敎、講演をきいても自心の營養ともなり、死靈への廻向供養ともなり、現當二世の御利益をうる事ができるのです。年忌法事の時に讀經唱題と共に說敎講演をやつて頂く等は最もよい佛事供養となるのです。この娑婆世界の人々は耳根得道と申しまして、耳から佛の覺りの心の音波をきいて悟りを開き、救はれたり解脫したりするのですから、大いに讀經唱題說敎講演をきいたりきかせたりしなければならない。法華經の信者行者たる者は釋尊は五十年間說敎遊ばされ、日蓮聖人は三十年間說法遊ばされた事實を手本として、力あらば一文一句たりとも語らせ給ふべしといふ敎誡を實行しなければならないのであります。」